

## 大いなる疑 (3/3) : 示の必要性

5.0

明:

もが抱く“大いなる”疑の三番目に するイスラ ムの回答。「私たちの 造主に仕えるには、どうすればよいのでしょうか？」

目: [事イスラ ムの信条人生の目的](#)

より: ロ レンス B ブラウン

日 06 Dec 2009

集日 21 Oct 2010

この 事の前二部では、二つの“大いなる ”に回答が与えられました。つまり私たちが 神によって 造されたこと、そして私たちの 造の理由が神に仕えるためだということが 明 にされました。そして三つめの とは、“もしも 造主が私たちをかれに仕え崇 するために 造したのであれば、それはどのように行なえば良いのでしょうか？”というものです。私は前回の 事で、それを行なうただ一つの方法は 示によって下された命令に う ことであると示唆しました。

しかし、多くの人々は私の主 にこう いかけるでしょう：なぜ人 に 示が必要なのか？ 善良な市民でいるだけで十分ではないのか？ 自分たちの方法で神を崇めるだけではだめなのか、と。

では、 示の必要性に して以下の点を述べていきたいと思います：この 事の第一部では、人生というものは不 に溢れていること、そして私たちの主は公正であるため、かれはこの 世ではなく、来世において正 を 立するということを明 にしました。そして正 とは、次の4つを きには 立されません。それらは、裁き（最 の 判）、 判者（ 造主）、人（人、 天使、その他の被造物）、そして 判がそこに基づくところの法の（ 示）です。私たちの 造主が人 に して特定の法を していなければ、いかにして正 を 立させることが

出来るでしょうか？ それは不可能です。もしそのような筋 きであれば、神はある犯罪をそれと知らずに行なってしまった人々を するという、正 ではなく不 を行なうことになります。

示が必要であるというそれ以外の理由は、何でしょうか？ まず人 は、 きをなくしては社会 政治 法などの にして、合意することすら出来ないからです。その 合、私たちはどうすれば神に して合意出来るでしょうか？ 造者よりも取り い 明 を良く くことが出来る者はいません。神は 造主、私たちは 造物であり、神以外には も、 造における全体的 画 を良く知る者はいないのです。 は自分の仕事の 、 、 酬を思うままに立案することが出来るでしょうか？ 全ての市民は自分たちの法律を定めることが出来ますか？ いいえ。そうでなければ、どうして私たちは自分たちの宗教を定めるようなことが出来るでしょう？ もし 史が私たちに何か教 を与えたとすれば、それは人 がその まぐれさに えば、惨事が引き起こされるということでしょう。一体どれだけの自由思想を げる人々が新しい宗教を起し、自分たちとその追 者たちを地上の と来世での破 に追いやったでしょうか？

そして、なぜ善良な市民でいるだけでは十分ではないのでしょうか？ またはなぜ私たち独自の方法で神を崇めてはならないのでしょうか？ なぜならまず人 の“善良さ”の定 は、 と 所により なるからです。一部の人々にとってそれは高 な 理と生活であり、また の人々にとっては狂 と混乱なのです。同 に、神への崇 と奉仕の概念も なります。よりの的を得た表 をすれば、レストランや商店においては、そこの商人が受け入れている通 以外での支 いをすることが出来ません。宗教においても同じことです。もしも人々が自分たちの奉仕と崇 を神に受け入れてもらおうと望むのであれば、彼らは神の求める通 で支 わなければならないのです。そしてその通 とは、神の 示に する服 を意味します。

あなたが自分の家で子供を育てる に、“まりごと”を作るのを想像してみてください。ある日あなたの子供の一人が自分の まりごとを作り出し、これからは自分の思い通りにやっていると高らかに宣言したとしましょう。あなたはどう反 するでしょうか？ 恐らくこう言うのではないのでしょうか：“その まりごとと一 に地 にでも行っちまえ”と

。考えてみて下さい。私たちは神の造物であり、かれの定めた法と共にこの宇宙に生きています。その法を自分手にきえる者にし、神が“地へ落ちてしまえ”と言うであろうことは当然だと言えるのではないのでしょうか。

ここでさのが出て来ます。私たちは、全ての喜びは造主からの祝福であり、それらが感にすることを知すべきですが、私たちの多くは生涯に渡ってそれらの祝福を受けていても、全く感しません。あるいは感するのを延します。英国の人工リザベスバレットブラウニングは、*The Cry of the Human* において、苦しむ人の皮肉をこう描き出しています：

唇は“神よ、ご慈悲を”と言いつつも、

“神に称えあれ”とは一度も言わず。

私たちは品行を改め、造主からの祝福にし、  
、感すべきであり、かつそれを生涯に渡ってけるべきではないのでしょうか？ かれにしてそれぐらいのはっているはずではないのでしょうか？

このいにはあなたは、“はい”と答えたはずですが、合意なしでここまでみめた人はいないはずですが、は次です：あなた方の多くは、もうバイブルには心が向いていないことを完全に自して“はい”と答えました。または少しはバイブルにいていますが、完全にそうではありません。あなたは私たちが造主によってられたことに同意しています。またあなたはかれへの理解にもがいています。そしてあなたはかれが述べられた方法で崇することを切望しています。しかし、あなたにはその方法、そしてどこにその答えがあるのかが分かりません。生憎、それはこの事で答えられるではありません。そのは本を一必要とするのです。

幸いにも私はこれにする本をきました。その名は、*The First and Final Commandment* (もうじきMisGod' edという名で再版されます) です。ここでんだ内容がになった人には、私がいた本をおめします。

Copyright 2009 Laurence B. Brown.

**????????B. ???????????**

**????[BrownL38@yahoo.com](mailto:BrownL38@yahoo.com)????????????????????The First and Final Commandment (Amana Publications)??**Bearing True Witness (Dar-us-Salam)**????????????????????**The English Scroll**????????The First and Final Commandment?MisGod'ed????**God'ed**????????????????????**

この 事のウェブアドレス:

<https://www.islamreligion.com/jp/articles/531>

著作 2006-2015 断 を禁じます。 2006 - 2023 IslamReligion.com. 断 を禁じます。